

平成21年5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520166
 研究課題名（和文）19世紀末のアメリカ小説とナショナリズムの諸相—グローバル化の中の国家と文学
 研究課題名（英文）Nationalism and American Novels at the Turn of the Century: Nation and Literature in the Age of Early Globalization
 研究代表者
 好井 千代（YOSHII CHIYO）
 大阪大学・文学研究科・助教
 研究者番号：90200930

研究成果の概要：

現代社会は金融経済の方面では急速に世界の一体化、グローバル化が進む一方で、民族主義を始めとする様々なナショナリズムが激化するという矛盾を抱えているとよく言われる。本研究では、そのような現代社会の源流を19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に遡り、この時代のグローバリゼーションとナショナリズムが複雑に絡み合う様相を、同時代のアメリカ文学を通して浮き彫りにし、そうすることで、近視眼的に語られることの多い現代社会を歴史的な文脈から捉え直した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	420,000	3,920,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：アメリカ文学、ナショナリズム、グローバリゼーション、世紀転換期、国家

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究開始直前の3年間は「世紀転換期のグローバリゼーションとアメリカ文学」の研究課題で科学研究費補助金を受け、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期に発生した初期グローバリゼーションに焦点をあてて、当時のグローバル化する世界の全体像を同時代のアメリカ文学を通して分析してきた。

(2) その中で、グローバリゼーションと同じ時期にグローバリゼーションと複雑に絡み

合いながら発生したナショナリズムにも関心を持ち始め、世紀転換期のグローバリゼーションの中で様々な形を取ってゆくナショナリズムをも、考察の対象にしようと考えた。このように研究の対象をこの時代の2大潮流の両方に拡大し、同時代のアメリカ文学からこれらの現象の特色をあぶり出すことで、文学を通して世紀転換期の時代を総合的にかつ一層深く捉えることができると考えたのである。

(3) 更に、この発想を深める中で、世紀転換

期のナショナリズムが、グローバリゼーションと対立する一方で深く結びついているという複雑な性格を持つことに気づき、グローバリゼーションと対立するタイプと緊密に結びついているタイプとに分けて考察することにし、この段階で、具体的な研究の進め方の見通しがたった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、19世紀から20世紀にかけての世紀転換期にグローバリゼーションと複雑に絡み合いながら発生、台頭したナショナリズムに焦点をあてて、その諸相を同時代のアメリカ文学、特にコスモポリタンを自認すると同時にナショナリズムの隆盛も強く認識していた Henry James の作品を通して考察し、グローバリゼーションとナショナリズムがせめぎあうこの時代のダイナミックで重層的な全体像を明らかにすることを目的としている。

(2) 具体的には、グローバリゼーションと対立する排他的な民族主義やネイティヴィズムの形をとるナショナリズムから、グローバリゼーションを利用して展開する帝国主義的ナショナリズムあるいは同化主義や cultural pluralism を掲げるアメリカのナショナリズムまで、19世紀末のナショナリズムの多様な形態を取り上げ、それらの現象を、E. J. Hobsbaum や Benedict Anderson らの古典的なナショナリズム研究を始め、Martha Nussbaum や Richard Rorty など最近の愛国主義論や最新の関連諸研究 (Walter Benn Michaels のアイデンティティ論や Hardt&Negri のグローバル国家論や「アメリカ帝国」をめぐるアメリカ研究など) をも取り入れて考察し、ナショナリズムとグローバリゼーションが密接に絡まりあった19世紀末の特質を浮き彫りにする。

(3) 更にこうした本研究の議論の枠を、民族主義とグローバリゼーションの葛藤が激化する現代との共通性にまで広げ、19世紀末という時代の現代的意義を提示する。

(4) 同時に、そのような100年前の現代性を当時のアメリカ文学がいかに的確に捉えていたかも明らかにし、19世紀末のアメリカ文学の現代性をも提示する。

3. 研究の方法

(1) 19世紀後半の欧米の新聞、雑誌、時事評論、政治家の講演集や書簡集などを収集、精読し、またナショナリズムやグローバリゼーションの歴史に関する研究書やこれら2

つの潮流に関する様々な議論や理論書をあわせて収集、精読し、この時代にナショナリズムがいかにグローバリゼーションと葛藤しつつ同時に緊密に結びついて発生、展開、多様化していったかを考察する。その際の手順としては、最初にまず、グローバリゼーションと葛藤し対立する排他的な民族主義やネイティヴィズムなどのナショナリズムの形態を集中的に分析する。

(2) これと並行して、コスモポリタンを自認すると同時にナショナリズムの台頭も強く認識していた同時代のアメリカの代表的な小説家、Henry James の諸作品を精読し、James がグローバリゼーションと対立するこのようなタイプのナショナリズムを自分の小説の中にいかに的確に描き出しているかを考察する。

(3) 次に、この時代のナショナリズムのもうひとつのタイプ、即ち、グローバリゼーションと折り合いをつけ、それを利用して展開する帝国主義あるいはアメリカの同化主義や cultural pluralism のナショナリズムの形態を集中的に分析する。

(4) これと平行して、James がグローバリゼーションと分ちがたく結びつくこのようなタイプのナショナリズムを自分の小説の中にいかに的確に描き出しているかを同時に考察する。

(5) 更に、ナショナリズムとグローバリゼーションの相互関係に関する最新のアメリカ研究やグローバリゼーション研究やその他の現代思潮の研究書を幅広く収集、精読し、それらの研究が通常取り上げる民族主義とグローバリゼーションが葛藤する現代社会とナショナリズムとグローバリゼーションの二大潮流が席捲した19世紀末の社会とを比較して、両者がいかに共通性を持っているかを考察し、19世紀末の現代的意義を明らかにする。

(6) あわせて、James が現代のグローバル社会のナショナリズムに通じる当時のナショナリズムの諸特徴を自分の小説の中にいかに的確に描き出しているかを考察し、James 文学の現代性をも明らかにする。

4. 研究成果

(1) まず、グローバリゼーションの波と葛藤し対立しながら19世紀後半の欧米各国を席卷した、愛国的なナショナリズムの形態をHenry Jamesの作品がいかにかに的確に描いているかという段階の研究成果としては、次の通りである。

Jamesの初期の代表作、The Portrait of a Ladyや、同じくJamesの初期の代表的なエッセー、“Occasional Paris”が、グローバルなコスモポリタニズムを掲げると同時に、同時代の欧米各国を覆った愛国的なナショナリズムをもいかに鮮烈に表象しているかを考察し、それを通して、相対立する二大潮流であるグローバリゼーションと愛国的なナショナリズムに引き裂かれた19世紀の欧米世界の矛盾した様相をJamesの著作が端的に具現している点を明らかにした。この研究成果は、英語論文にまとめた。

(2) 次に、グローバリゼーションと対立するのでなく、逆にその流れを利用しその流れと融合しながら発展した19世紀後半のアメリカの多文化主義的なナショナリズムに焦点をあて、そうしたナショナリズムの輪郭をHenry Jamesが作品中に極めて印象的に描きこんでいる点を検証したが、この段階の研究成果は、以下の通りである。

Jamesの初期の代表作の一つ“Daisy Miller”を取り上げ、19世紀後半にアメリカに脅威を与えるほど大量に流入したalienな新移民を思わせる下の階級の外国人と親しく交わる成金の娘である主人公のアメリカ娘Daisy Millerが、新興経済国家アメリカにみられる、貧しい移民（移民は19世紀後半のグローバリゼーションの顕著な一つの現象である）を格好のマーケットかつ労働力として歓迎し彼らにcapitalizeして伸張しようとする市場主義と結びついた多文化主義的なナショナリズムの傾向を表している点を考察した。

(3) 更に、こうした19世紀末のナショナリズムの様態が、グローバルな現代社会が抱えるナショナリズムの形といかに共通性があり、その源流であったかという点にまで研究を拡大し、そうした視点からHenry Jamesの作品を解読して、そこに描かれた現代的な19世紀末のナショナリズムの局面を検証したが、この段階の研究成果としては、以下の通りである。

Jamesの代表作の一つ、“Daisy Miller”を取り上げ、そこに、19世紀後半に様々な利潤（金銭上の利益からエリートのステイタスという社会的な利益まで）を求めて海外に進

出したおびただしい数のアメリカ人群像が描かれていることを検証し、このようにグローバリゼーションを利用して他国から利益を吸い上げ国力を増強してゆくアメリカの国家の論理が、現代のアメリカの国家としての原動力を同じものである点も明らかにした。グローバリゼーションがアメリカという特定の国を世界の頂点に押し上げていく状況だ19世紀後半に生じて、現代はその延長線上にあるというこの“Daisy Miller”論は、2008年アメリカ学会で研究発表した。

(4) 以上のように、本研究を開始して3年間、グローバリゼーションと錯綜した関係を結ぶナショナリズムの複雑な様相を考察し、更に、こうした19世紀末のナショナリズムの様態が、グローバルな現代社会が抱えるナショナリズムの形といかに共通性があり、その源流であったかという点にまで研究を拡大してきたが、こうした3年間の研究をふまえて、本研究の最終年度は、更に、近年の世界金融危機を招いたネオリベリズムを様々な論じた最新のグローバリゼーション研究やアメリカ研究の成果を取り入れて、当研究を深化させた。具体的には、Jamesの代表作の一つ、“Daisy Miller”を取り上げ、この小説が、グローバルな規模で他国から利益を吸い上げ国力を増強するという形で19世紀の初期グローバリゼーションを牽引したアメリカを、批判の対象として扱っていると論じた自らの論考を、上記の先端的な現代思想を取り入れて深化させ、ここで問題になっている19世紀のグローバル国家アメリカが現代のネオリベラルな金融帝国アメリカにいかに通じているかを考察した。

(5) 19世紀末のグローバリゼーションとナショナリズムに焦点をあてたこれらの研究成果は、20世紀以降の現代社会を主な研究対象とする現代のグローバリゼーション研究、ナショナリズム研究、およびそれらの研究との接点をはかるアメリカ研究の裾野を広げ、深化、拡充する意義を持つ。今後は、これらの研究をふまえて、階級格差や経済格差に比重を移しつつある現代の最新のグローバリゼーション研究の動向を取り入れて、更に本研究を先端的なものへと深化させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

好井 千代、Daisy MillerのUn-American Flirting、アメリカ学会、2008年5月31日、同志社大学.

6. 研究組織

(1)研究代表者

好井 千代 (YOSHII CHIYO)
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：90200930

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし